

説

苑



大山街道の道しるべを探ねて

春 木 節 郎

目次

- 一、前書
- 二、大山概説
- 三、大山街道
- 四、道しるべを探ねて
- 五、結言

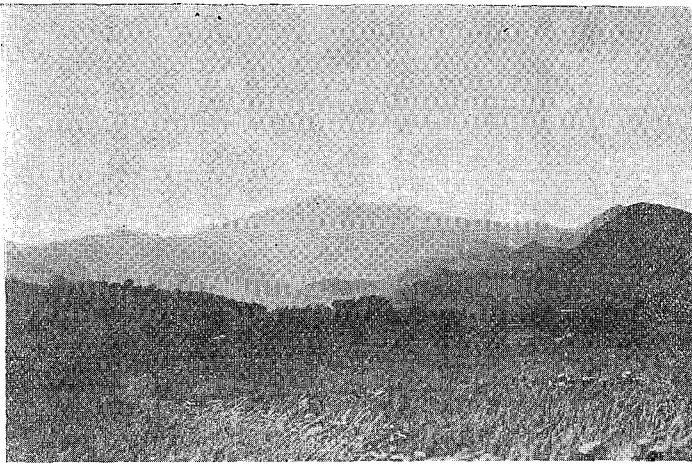
一、前書

大山街道と云ふのは、陸地測量部の圖面にも、大山街道

と、明記してあるのでありますが、要は相模國大山へ參詣する道を云ふのであります。此の道標が、近來道路改修の爲め、其所在を明かにしなくなつた事や、或は又好事家の園庭裝飾の爲め賣買せられるので、自然其數も減じ、將來は全く昔の道標は、其影を失ふてしまふだらうと、考へられますので、道路調査のついでに、現在存置するものを探ねて、其數箇を探ねあてたので、此れを集録したのであります。

二、大山概説

相模の大山は一名を雨降山アツシと稱し、標高壹千二百四十六米あります、丹澤山塊五峯中の一峯で、其東南端に位し、相模川の平野に面し、錐状の山頂が、聳然として屹立し、富士見を背景としてゐる絶景は、東京方面からよく見えます其山貌の秀麗な事、山靈の崇高な事から、自然を崇拜する事を専らとした、有史以前から、相模及其附近の、幾多の民衆から崇拜せられ、其精神界に偉大な印象と、感化とを與へたもので、今日尙頂上には、縣社阿夫利神社があり、大山祇神を祭り、山腹には、大山不動があつて、山頂は眺



神奈川縣愛甲郡高部屋村新田より大山東側を望む

望、雄渾、相模平野を眼下、指呼の間に望み、江の島から

三浦半島、東京灣を南方に、北に丹澤山、秩父連山を俯瞰する事が出来關東三山の一として知られ、年々約二十萬を越ゆる參拜者があり、其山麓には、先導師を主として形成せられた、大山町があり、昭和十年の縣の統計によれば、戸數三一七戸、人口一六八七人を擁する、繁華な町であります。

之れを見ても、如何に大山崇拜者が、多いか、想像するに難くないのであります。

序に大山史と云ふ様なものを、略記して御參考に資したいと思ひます。

崇神天皇の御代に、大山の頂上に登り、不動石像及石華表を拜したものがあつたと云ふ事ですが、其後、景行天皇の御宇に、日本武尊の御東征に際し、當山の南麓、東秦野村の蓑毛に御滯陣し給ひ、一日大山に、部將を率ゐて、御登山せられました際、御下山にあたり、驟雨が來ましたので、蓑毛の村民は、早速新しい蓑を作り、尊を御迎ひに上り、之れを献上しました處、尊は非常に、御喜びになつて、今後は此の宿を蓑毛と呼ぶ様にとの仰せがあつた、それが蓑毛の名の始まりであると云ふ傳説もあり、又、尊が御腰掛けになつた、御腰掛石もあると云ふ傳説もありますが、史蹟が明かではないのであります。

元正天皇の御代に行基菩薩が大山に登らんと欲して能はざりしと云ひ、大山に始めて登山したのは良辨僧正でありまして、大山は實に此の人の開山であります。

良辨僧正は、孝謙天皇の天平勝寶四年に、始めて當山頂上に登り、生身の不動尊を拜し、之れに模して明王權現の像を刻し、朝廷に請ふて救願寺とし、名を大山寺と命じ、

其頂上に阿夫利神社を祀る事と致しました、此時朝廷は詔して、相模、安房、上總の三國を寺領とせられた。

次で弘法大師の登山などありましたが、

陽成天皇の元慶三年に關東大地震あり、大山の堂塔伽藍、皆潰倒し、或は火を發して、全滅しました。

後、元慶五年、安然和尚先づ常念總持院を修補し、華嚴、眞言、天台三宗兼學の山とし、

宇多天皇の寛平二年、山頂の石尊宮本殿を建立し、

醍醐天皇の延喜年間、阿夫利神社を以て延喜式内の一に列せしめられました。

鎌倉幕府に至るに及び、頼朝公は深く石尊權現及不動尊を信じまして、夫人政子の安産の御祈禱をしたと云ふ事で、又河津三郎祐泰の道孤、曾我祐成、時致の兩人も、幼少より大山不動尊を信仰したと云ふ事であり、蓋し此の兩人は幼時此附近の足柄上郡曾我の里に住んでゐたからであります。

中古

關東の文化は、鎌倉幕府の創設により、愈々進歩發展し、更に治承の亂は、益々其向上を促進するに至りました、處で鎌倉幕府末期に於て、願行上人は、北條貞時の助勢を得て、大山が、聖武帝の敕願寺であつて、其名、海内に高きにも係らず、西國の諸刹に比し、規模狹隘見るに忍びざるものがあるので、更らに明王の大像を鑄て、自ら一坊を草しましたので、大山不動の名は、更に高まり、賽者雲集すと云はれてをります。

其後南北朝に至り、武人の天下となつてから、大山も其影響を受け、室町足利氏及鎌倉足利氏の寄進造營あり、益々盛大となりましたが、大山の神職等は、武を練り、劍を學び、豊臣氏が、小田原の北條氏を攻めました時、北條氏の爲め山中城を守り、之れが爲め、豊臣氏より、大山衆徒の狼籍を禁ぜられ、徳川幕府に至り、更に一大刷新を加へられたと云ふ事です。

近 古

慶長十年徳川家康、大山に至り、之れを刷新し、三十六

ヶ寺とし、徳川氏の祈願所としましたので、關東の高野と稱せらるるに至りました。

又、春日の局は、大山を深く信仰しまして、家光公の繼嗣問題、宇都宮の釣天井の如き、皆大山明王の御加護によるものとして、益々深く崇拜し、次で寛永の大修繕をなし、更らに元祿の大修繕をなし、堂宇の輪奐其美を盡せりと云はれました、然るに其後安政の大火がありまして、之れ等は烏有に歸してしまふ、後、明治維新となりました。

現 代

明治維新になつてから、神佛混淆が廢せられ、阿夫利神社は寺から別れて、別當八大坊は廢寺となり、新たに明王寺が創立されたが、大正四年十月觀音寺を合せて、再び大山寺の舊稱に復しました。

現在では、山頂に三社あり、其中央が本社で、オホヤマノミコ大山祇神を祀り、オホカミツツツカミ奥社は、オホカミツツツカミ大雷神を、オホカミツツツカミ前社には、オホカミツツツカミ高麗神が祀つてあります。

此處から、約三軒を下つて、下社阿夫利神社があつて、

頂上の三社が合祀してあります、此處迄は「ケーブル・カー」が上ります。

此の「ケーブル・カー」の中途即ち山腹に、國寶鐵製、結跏趺坐の不動明王像を本尊とする、大山寺があります。明治二十年六月の調査によりますと、信徒凡そ五十萬戶、講社に加はるもの約二十萬戶で、一ヶ年の參詣人は、五萬人を下らぬと云ふ事ですが、年々歳々參拜者の數を増加し、現今では信徒戶數、百五十萬戶、講社團體四千、參詣人は大體、關東一圓と、靜岡縣とを主とし、遠く關西、北陸より參詣する人も少なくなく、且つ近來流行する「ハイキング」等で參詣するものを合せ、實に二十萬人を越ゆると稱せられてゐます。

三、大山街道

大山は、有史以前より、相模の國及其附近の民衆の崇敬を集めて、聖武帝の御宇には、敕願寺となり、相模、安房、上總の寺領を有しましたし、就中、平安時代に入つてから

は、都をはじめ諸國に山の信仰が盛んになつたので、大山は國御嶽の一となり、參詣するものが多くなりました、又、鎌倉幕府時代には、其祈禱所となり、更に徳川氏の時には其祈願所となりましたので、有史以前より、近國の參拜者が雲集し、殊に鎌倉時代には、武士の宗教信仰、隆盛となり、従つて大山寺への信崇も深くなり、民衆も亦、此山への往來が益々頻繁となりましたので、大山に通ずる道路が自然開發せらるる様になり、此時代から自然に大山道と呼ぶ様になつたのであらうと思はれます。

かくの如き状態でありましたから、殆んど相模國全國に渡り、大小岐路、苟も其一端が、大山に達するものは、凡て大山道ならざるなしと云ふ有様で、其岐路に至つて、人の迷ふ様な處には、必らず大山道の石標が、設立され、石標實に壘々たりしと云はれてゐますが、今は殆んど其影もないものが多のであります。

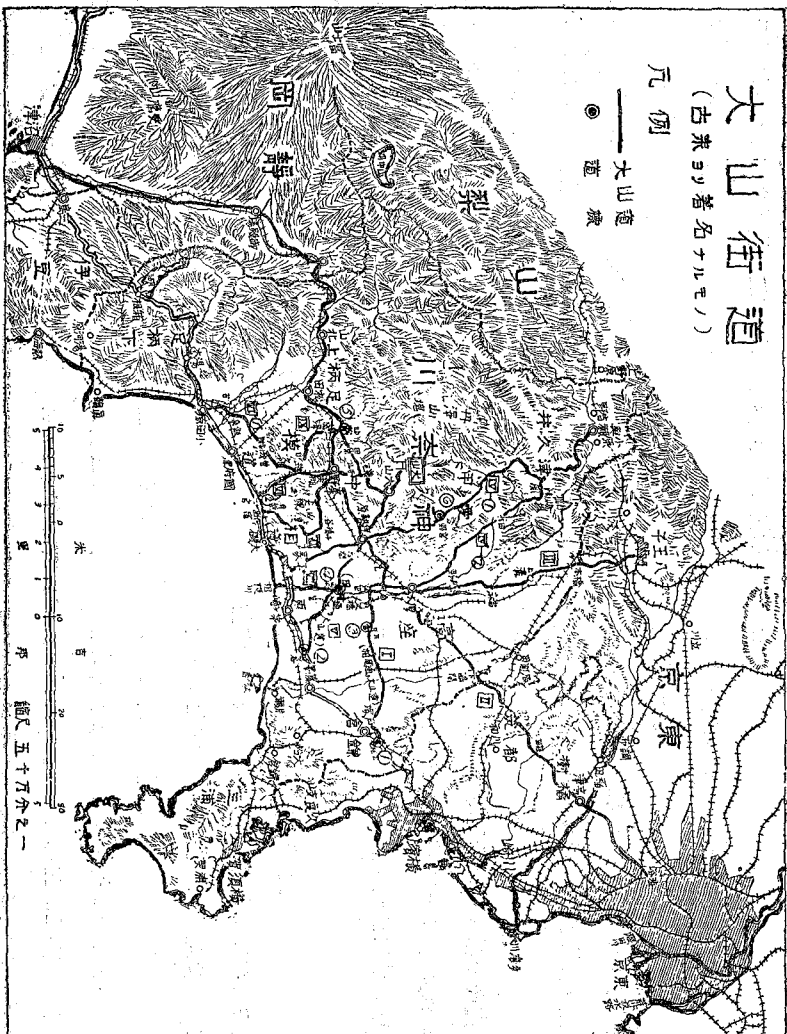
今、大山道として、古來より有名なるものを擧げて見ますと、

大山街道

(古來ヨリ著名ナルモノ)

元例

— 大山道
● 道



說 施

I 柏尾通り大山道

相模國鎌倉郡川上村上柏尾にて、東海道に別れ、中川村、中和田村を經、高座郡澁谷村に入り、御所見村用田を經て、有馬村門澤橋に至り、相模川を渡り、中郡相川村戸田を經、同村酒井より、伊勢原町に達するもの。

II 所謂大山街道（或は青山街道）

東京赤坂より青山を經、澁谷、世田ヶ谷に出で、多摩川を渡り、橋樹郡高津町溝ノ口、都筑郡山内村荏田を經、高座郡大和村下鶴間、同郡海老名村國分に出で、相模川を渡り、厚木町を經、中郡相川村酒井に至り、柏尾通り大山道に合するもの。

III 八王子街道

八王子町より、南多摩郡堺村橋本に出で、高座郡上溝町を經、麻溝村當麻に出で、相模川を渡り、南下して厚木町に至るもの。

IV 津久井郡より二條の道

(1) 與瀬町より、津久井郡串川村關に至り、此處にて岐

れて愛甲郡煤ヶ谷村宮野を經、伊勢原町に至るもの。

(2) 串川村關より、愛川村田代に出で、中津川を互り、荻野村下萩野を經て、厚木町に至るもの。

V 田村通り大山道

藤澤町四ツ谷にて、東海道に別れ、寒川村一ノ宮を經、相模川を渡り、中郡神田村田村を經、中郡大田村上平間に出で、伊勢原町に至るもの。

VI

(1) 小田原町より、足柄下郡足柄村多古に出で、酒匂川の飯泉渡を越え、足柄下郡下曾我村曾我別所六本松を經、足柄上郡中井村久所に出で、秦野町を經、伊勢原町に至るもの。

(2) 中郡吾妻村二ノ宮にて東海道と別れ、足柄上郡中井村井ノ口を經、秦野町に至り、東秦野村蓑毛を經て大山に達するもの。

VII 平塚町より伊勢原町に達するもの

VIII

中郡國府村新宿にて東海道に別れ、國府村月京、土澤村上吉澤、金目村千須谷、秦野町下大槻、上大槻を經、秦野町に至るもの。

IX

足柄上郡中井村井ノ口より別れ、中郡西秦野村澁澤、曲松を經、東秦野村田原、寺山に出で、蓑毛に至るもの。

以上九本の道路が、古道として著名なものだと考へられます。

現在、大山に至るには、左の四本が縣道ではあるし、道路幅員も廣く、路面もよく、自動車も樂に通るし、最もよい道路であります。

(一) 横濱市より、都筑郡都岡村下今宿に出で、高座郡綾瀬村蓼川、海老名村國分を經、相模川を渡り、厚木町を經、伊勢原町に至り、大山町に達するもの。

(二) 藤澤町より、御所見村用田を經、厚木町に至るもの。

(三) 平塚町より伊勢原町に至るもの。

(四) 國府津町より、松田町神山に出で、秦野町を經て、伊勢原町に至るもの。

以上であります。

然し現在では、汽車や、電車の便がありますので、大詣でをするには、

(一) 東京の新宿驛から、小田原急行電車で、伊勢原町に至り、それより乗合自動車で、大山町に下車し、大山川に沿ひ上ること約十五六町餘で、「ケーブル・カー」の乗車驛に達します。

(二) 東海道本線、平塚驛下車、乗合自動車で伊勢原町を經て、大山町に至るものもあります。

(三) 東海道本線、二の宮驛にて下車、湘南軌道で、秦野町迄行き、それより伊勢原町に至るか、或は又、徒歩蓑毛に至り、此處より登山するか、又は蓑毛より、丹澤山林道「ヤビツ」峠を越えて、大山頂上に至る「ハイキングコース」もあります。

(四) 横濱から神中鐵道で、厚木中新田口驛に至り、小



神奈川縣鎌倉郡川上村下柏尾地先道標

ねましたが、確かにあの邊にあつたが、今はどうですかと云ふ様な具合で、頗る曖昧なのが澤山ありました、實際往つて見るとありません、こうして、色々探しました結果、六ヶ所に発見しました。

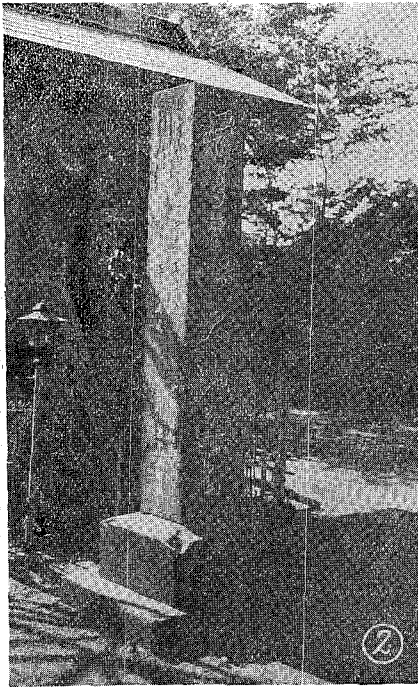
あるものは、比較的立派な堂宇の裡に、整然と祀られたものもありますし、あるものは、路傍に他の石塊と一處に倒れた儘、見別けもつかぬ程、

田急（河原口驛）に乗換へ、伊勢原町に至るコースもあります。

此の外色々のコースもありませうが、主なるものは、右の四本位なものです。

四、道しるべを探ねて

前述しました、九本の古道を主として道しるべのありそうな處、或は又、土地の古老について探



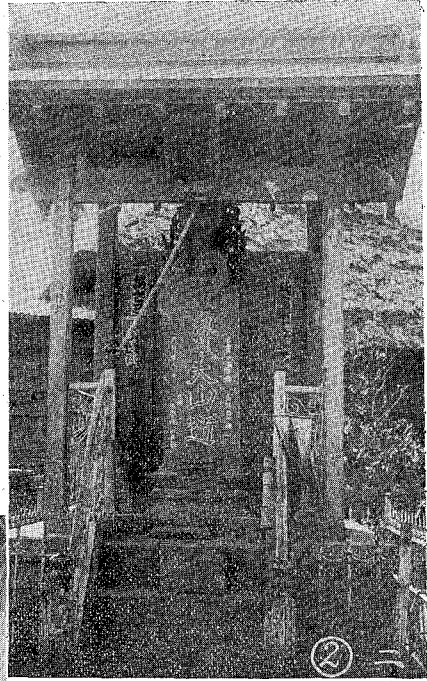
神奈川縣高座郡藤澤町四谷地先道標 1

壘々たる石塊の中に轉つてゐたのもありました、兎も角も、寫眞をとつてをききましたから、御一覽を願ひます。

今、此の六ヶ所について、簡単に説明をしてをきます。東海道には二ヶ所ありました。

1 神奈川縣鎌倉郡川上村下柏尾地先道標

東海道から、北に岐るる岐路の、北側の民家の垣根の前にありまして、明治五壬申年六月吉辰、



神奈川縣高座郡藤澤町四谷地先道標 2

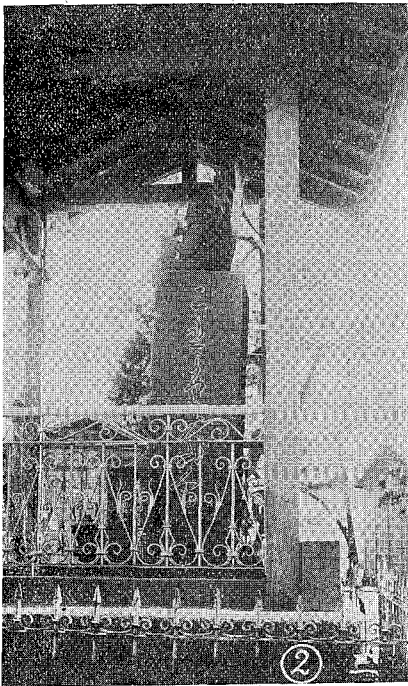
建設したので、新しいものであります。

2 神奈川縣高座郡藤澤町四ツ谷地先道標

東海道で藤澤町と、茅ヶ崎町との略々中間で、北に別かるる路の三角地帯にありました。

此の處には、道標が三本ありまして内二本は比較的立派な御堂の中にあり一本は其外側にあります。

御堂の中の、正面の道標の上には、石像の不動



神奈川縣高座郡藤澤町四谷地先道標 3



神奈川縣高座郡御所見村用田地先道標

六年前) 建立、天保六未歲正月(紀元二四九五年今より一〇二年前) 再建としてありました。

此の處は鎌倉よりの道筋に當り、其上東海道と合致しますので、當時は鎌倉より大山へ、大山より鎌倉への人馬が駁賑を極めたそうで、馬の立場に當り、現在も尙此附近には、立場其儘の人家が二三軒残つてゐます、これが田村通り大山道の入口であります。

尊があります、其右側には小さい道標が一本ありました。

御堂正面の道標は、延寶四丙辰歲六月二十八日(紀元一三三六年今より二六一年前)の建設と刻みてあり、小さい道標には、萬治四年正月(紀元一三三二年今より二七六年前) 建つとしてあります。

御堂の前の分は、萬治四丑年正月(今より二七



神奈川縣中郡神田村田地先道標

3 神奈川縣高座郡御所見村用田地先道標

柏尾通り大山道の用田、十字路の西南隅にありまして。道標の上に石像があります、恐らくは、不動尊像かと思はれますが、少し格好が怪しいのであります、兎も角、整然としてゐまして、草花が

手向けてありました、安

永四年乙未十二月吉日

(紀元二四三五年今より

一六二年前)の建立と刻

されてゐます。

4 神奈川縣中郡神田

村田村地先道標

相模川畔の、平塚厚木

街道と大山街道即ち田村

通り大山道との交叉する、十字路の東北隅の鐵製、火の見

櫓の傍に、他の道標や、道祖神の石材と、一處に混然と轉

つてゐました。



神奈川縣中郡西秦野村曲松地先道標

此の建設年號は、○曆九卯十二月吉日と、刻してありますが、初めの字の處が、石が缺けて、不明であります。九年にして卯歳とすれば寶曆九年(紀元二四一九年今より一七八年前)と、想定が出来ます。

5 神奈川縣中郡西秦

野村曲松地先道標

松田、秦野街道の曲松

の十字路を北側に約十間

程入りたる處、即ち藁毛

街道であります、其の西

側の人家外れの畑の角に

建つてありましたが、其

附近には割栗石が堆積せ

られ、且つ草茫々で、一

寸見當が、つかなくつたのであります。

これは文化五戊辰正月吉日(紀元二四六八年今より一二

九年前)の建設であります。

6 神奈川縣愛甲郡煤ヶ谷村宮野地先道標

之れは厚木町から、小鮎川に沿ふて遡り、鳥屋町及與瀬町に至る道路を、伊勢原町に至る道路との、三叉路にあたる宮野と云ふ處の西南隅に、山を背にして一堂宇が建つて

ゐまして、其中に立派に祀つてあります、道標の上には、美事な不動尊像があり、彫刻された文字も、頗る鮮やかで、献燈迄してありました。

之れは明和元甲申稔九月吉辰（紀元二四二四年今より一七三三年前）の建立であります。

以上六ヶ所、八本でありますが、明治年代のものを除き他の七本は、徳川四代將軍より十一代將軍に至る間に、建設されたものであります、此れを見ても、如何に徳川時代



神奈川縣愛甲郡煤ヶ谷村宮野地先道標

五、結言

大山道標は、探せば未だ此の外に澤山あるだらうとは思ひますが、不取敢、探し當てたものに就て、其大略を記述してをきました。

「江戸みち」であるとか「鎌倉みち」であるとかと刻された、此の種の道標は世の變遷につれて次第に、其影を失ふてしまふ事でありませうが、然し此の道標の所在、形態、彫刻せる文字等には珍重すべき數々があり、又、史料としての價値が十分

にあるものと信じますので、是非、何等かの方法で保存の道を講じたいと思ひます。こう云ふ意味で本篇を起草したのでありますから、聊かにても同好の士の資料となるを得ば、幸甚至極であります。

尚、終りに臨みて、本稿を草するに當り、石野瑛氏著「大
山縁起」による事、甚だ多きを深謝致します。(終)

(一二、九、一六)

英國道路交通調査(一)

大 國 實

は し が き

英國に於ては一九二二年以來交通省に依り道路交通の組織的な調査が行はれ來たつた。即ち第一級道路 (Class I Roads) に付ては一九二二年、一九二五年、一九二八年、一九三一年及一九三五年の各年に於て行はれ、又第二級道路 (Class II Roads) に付ては一九二三年、一九二六年、一九二九年及一九三六年に於て行れたのである。右の調査

に付ては夫々報告書が公にされて居る。こゝに一九三五年の第一級道路交通調査及一九三六年の第二級道路交通調査の報告書を譯述する。但し附録表は、成る可く要約する様に努めた。我國の道路行政に何等かの示唆を與ふる所あらば幸である。

因みに英國に於ける道路は等級道路 (Classified Roads) と非等級道路 (Unclassified Roads) とに分類され、前者は更に第一級道路と第二級道路とに分類される。第一級道